

# 一枚の写真

愛野友子

その写真を見た途端、今までの謎が急に解けたような気がした。

私は、夫と一緒に母の引越しの手伝いに来ていた。「物置の中の残っているものはみんな要らないから、欲しいものがあれば持って行っていいよ」と母が言うので、夫と二人で物色(?)していると、ほこりのかぶった米びつほどの大きさのブリキの箱があった。

「この箱、何が入っているの？」と母に聞くと、

「あ、それ菊次郎の」

「とっておかなくていいの？」

「うん、いらぬ。ここに来てから、一回もあけてないわ」

両親は、戦後にこの家へ引っ越してきたので、六十年以上もそのままだったことになる。母がなぜか呼び捨てにする菊次郎という人は、私の父方の祖父、母にとっては舅だ。

祖父は、結婚が許されない禅寺の僧との間にできた子供だったのでどこかの家へ預けられ、そこで苦学して警察官になり、そのあとテストを受けて警部補にまでなったとのことだった。戦前戦中の警察官は今と違って怖い存在だったようだ。退職後は、質屋をしながら、家の横に道場を作って剣道の師範をしていたのだが、家の中でも、典型的な亭主関白の頑固者だったらしい。

「そりやもう、いつも自分の思い通りでないと気が済まないのだから、大変だったわ。いいときに死んだよ、敗戦で日本は思想が百八十度変わったでしょ、生きていたらとても耐えられなかったわよ」、終戦直前に亡くなった祖父のことを、母はいつもそんな風に吐き捨てるように言うのだった。

ところが、父から聞く祖父の様子はかなり違っている。

「立派なひげをピンとたてて、胸を張って、そりやあ怖そうで威厳があったんだ。だけど、わしが軍隊に召集される前の晩、手招きして呼ぶから近くに行くと、耳元で小さな声で、『突撃の合図が出て、すぐに走り出すな。少し待って、人の背中の後ろか

ら行け』そう言うんだ」

戦時中のことはよく知らないが、そんなことをいう人は「非国民」と言われて、通報されると逮捕されたはず、そして逮捕する役目の人が警官ではないのか？ 剣道の師範が言う言葉とも、とても思えない。

物置の中で六十年以上も眠っていたその箱を開けてみると、中は感謝状などの賞状、桐箱に入った勲章、そして集合写真が数枚、綺麗に整理して入っていた。賞状の名前は「警察署長殿」となっている。

集合写真を見ていた夫が、前列にすわる一人の人物を指して言った。

「おい、これ見ろよ。おまえの宝塚の兄さんが写ってるぞ！」

「え、なんでこんな所に兄が、つけ髭つけて座ってるのよ」

そう思うくらい、本当に私の兄そっくりの祖父がそこにいた。そういえば、小さいころから仏壇で見ていたのは祖母の写真だけで、祖父の写真を今まで見たことがなかった。

写真の中のその人は想像とは全然違っていた。小柄で華奢で色白、だから太くて先がぴんと上を向いた髭をはやすことで、威厳を作っていたのだ。この写真を見て、今までの色々な疑問がぱっと解けた気がした。

なかなか子供ができず、養子ももらったあとに生まれてきたのが私の父だ。日本人離れした色白の、いわゆる「腺病質」な子供だったようだ。その体質を受け継いだ兄は、自分をきたえようと大学でワンダーフォーゲル部に入ったのだが、その最初の合宿の登山で体調をくずし、部長に担がれて家に帰ってきた。医者の診断は「無理をしたことによる心臓肥大」。そんな兄に外見がそっくりの祖父も、元は体が弱かったに違いない。

きっと祖父は、病弱な息子が心配で仕方なかったのだろう。けれど、「剣道で鍛えてやる」みたいなことはしなかった。父はまた、兵役検査で自分は「乙」だったので、「甲」を貰ったと言う友人のたくましい体がうらやましかったと言っていたが、「乙」だったことについても、祖父は何も責めるようなことは言っていない。

父は、北海道大学に行きたかったのだが、勉強していると決まって祖父が来て用事を言いつけて邪魔をする。結局勉強があまりできず、第二志望に合格したのだが、祖父はとても喜んで、父を連れて近所に息子の合格を誇らしげに言い回った。あんな

に勉強を邪魔していたのになぜだろうと父はよく首をかしげていたのだが、その謎も解けた。当時、結核は最も恐ろしい死の病で、青白く体格が貧弱な若者、特に文学青年のような人がかかりやすいと思われていた。だから部屋の中にこもって、猫背で勉強する父の姿を見るたび不安になって、用事を言いつけては外に連れ出し、新鮮な空気を吸わせ、少しでも運動させようとしたのだ。

さて、その父がいよいよ召集され、外地へ行く前の訓練での話。

「わしは本当に運動音痴なんだ。手りゅう弾を投げるだろ？ 隊長が『前進！』と言った後、『八尾（父の名）後退！ 八尾後退！』投げる力が弱くて、わしの弾は足元すぐのところ落ちてるんだものな、本物なら自爆だぜ」

「銃を持って、隊で列を作って走る訓練の時、下はぬかるんでいるし、疲れて足がもつれて転んだんだ。その訓練の最後に全員の前で中尉が話をしたとき、わしの名前が呼ばれたから、ああこれは怒られるなと思ったら、『八尾は今日、転んだときに銃を体の上にあげて、大事な銃をぬらさないようにした、大変よろしい』と言うんだ」

「訓練はしんどいし、何とか休みたいと思って、体温計の端っこをコンコンと机にやっていたら、三十八度を超えてしまって、こりゃ上がりすぎた、ばれたらいかんと思つて、振つて下げているときに上官が通りかかって、『八尾は訓練に出たいからと、熱があるのに下げている』とまた皆の前ではめるんだ。伍長がわしのシーツを嫌がらせでわざと隠したときも、少尉が自分の上等のシーツをくれたし、少尉や中尉になぜかわいがられていたんだ」

これについては、のちに母がこう言っていた。

「そりゃそうよ、じいさんが、上官たちの名前を調べてその家の住所を探し出して、ここへ送つておきなさいって何回品物を送らされたことか！」

結局、父は結核の疑いありという軍医の診断が下つて外地へ赴く前に帰ってくるこゝとができた。「その後の精密検査で結核ではなかったとわかって、本当にほっとしたんだ」と父は言っていたのだが、もしかしたら父が早く除隊できるように祖父がウラで動いていたのかもしれない。そのあとも祖父は、また父に召集が来てはいけないからと、造船の会社に勤めさせ、父がその会社の重要人物、つまり父がいなければ船が作れない、ということにしてもらった。その当時は若い男性はみな戦争に行っていたので、父と一緒に歩いていると目立って、周囲からジロジロ見られて嫌だったと母から聞いた。

昭和十九年兄が生まれるが、生後何ヶ月かでジフテリアとヘルパンギーナにかかってしまった。大学病院に入院したがなかなか治らない。ここでまた、祖父の出番となる。祖父は警察官を退職後、質屋をしながら病院へ器具の納入もしていたらしい。それで戦時中の物資のない中、貴重な薬を手配してお医者さんに渡し、そのおかげで何とか兄は命をとりとめた。

当時の家の写真を見ると、質屋の看板の横に「炭」とある。北海道で生きるために必要な物だ。最後は、自分の家を中尉や少尉のために開放し、自分たち夫婦はその横の暗く湿った倉で暮らしていたそう。そこでカビか何かにやられたのだろうか、祖父は肺炎になって、あっけなく亡くなってしまったのだという。自分の家を軍に解放したのは、正確な情勢をつかみ、そしてユネを作っておくためだったのではないだろうか。戦時下で家族が無事生き延びるために。

息子である父が「お国のために天皇陛下のために」といった当時の偏狭なナショナリズムに流されず、こんな自由な思想を持っているということは、祖父は大本營の発表のまやかしも、戦争の大義など元々なかったことも、実は早くから見抜いていたのではないかと思ったりする。

祖父の生き方はかっこよいとは言えないけれど、家族を守ることと一本しっかり筋が通っている。それにしても母は、自分の夫や息子を戦争の中で苦勞して守ってくれた祖父を呼び捨てにして、ひどい話である。感情が隠しきれない母なので、きっと生前の祖父も気づいていただろう。けれど、そもそも父と母の縁結びも祖父なのだ。母の父親は銀行の支店長だったので、何かの会合で知り合いになって、父親同士の話で結婚が決まったそう。父と母本人同士が最初に会ったのが結婚式というのだから、のんきな二人である。なぜ祖父は母を選んだのだろうか？

母は六人兄弟の五番目で、当時には珍しく、赤ちゃんから一人も欠けずに六人とも大人になった。そして母の兄嫁が結核で亡くなり、二人目の兄嫁もまた結核で亡くなってしまふのだが、それでも兄も、兄の家へよく遊びに行っていた母も、感染しなかったということは、母の家系は結核に耐性だということだ。そんな話を聞いて祖父は、父の結婚相手に母を決めたのではないだろうか？祖父のおめがねにかなった母は、十三年の間に四人の子供を産み、八十八歳の今でもとても元気だ。

「わしにふくれっ面しようが、隠れて呼び捨てにしようが、そんなことよりも、元氣な子供を産んでくれることのほうがずっと大事だったんだよ」そう言って、どこかで

祖父がいたずらっぽく笑っているような気がする。

ちなみに、「捨てるなんてひどすぎるってあんたたちに怒られて、ちょっと反省してさあ」と母が恥ずかしそうに言っていたあの写真の入ったブリキの箱は、引越し先のマンションの納戸の棚に、今も無事収まっている。